

令和4年度第3回 史跡小田原城跡御用米曲輪戦国期整備検討部会会議録

日 時：令和4年8月30日（火）午後1時30分～午後4時30分
会 場：おだわら市民交流センター UMECO 会議室2
出席者：小野部会長、小沢副部会長、高妻部会員、中島部会員
オブザーバー：神奈川県教育委員会文化遺産課 富永副主幹
コンサルタント：（株）文化財保存計画協会 山田研究員、難波研究員
事務局：湯浅文化財課長、小林副課長（史跡整備係長）、
長谷川副課長（文化財係長）、佐々木係長、大島主査、
土屋主査、保坂主任
経済部小田原城総管理事務所 清水所長、諏訪間主査
建設部みどり公園課 山崎係長

【開会あいさつ】

【資料の確認】

【会議の公開について】

御用米曲輪の整備について（部会員よりご報告）

ア 小野部会長発表

小野部会長

整備をどうしようという結論の方向への話ではなく、むしろ、御用米曲輪の発掘によって見つかった戦国期の庭園を中心とする遺構群が中世考古学、あるいは、戦国期の第二権力を考えるうえでどんな意味を持っているかということのを位置付けとして話したいと思います。

今回の整備で出ている遺構が直接的な対象ですが、実はどういう意味があってそれを整備しようかという。あるいは、学会レベルで言えば、何をどう表現して、それをどう市民や研究者に渡すのか。そこが一番大事だと思っています。

私自身がかかわってきた戦国期の大名館を考えてみながら御用米曲輪についてこういうことを出していこうよ、という話をさせていただきたいと思います。

御用米曲輪の発掘の意義を大きくまとめれば上の3つだと思っています。

1つは、定かでなかった東国における戦国大名館、この空間遺構群がある程度の議論の対象として考古学の世界でやっていかれるということです。他にもいくつか発掘例はあるのですが、議論するレベルで、東国でここまで、特に関東の中で戦国大名館が分かっている。これはあまりなかった。そういう意味で他と比べる、議論する、本当にいい材料ができた、ということになります。

今川、武田、上杉、佐竹、この辺りは、全然まだまともな調査が行われていないです。

佐倉に行ってから千葉は一応、多少やっていますが、いくつか問題がありますし、少しランクは落ちますが、小田原だけがそれぞれ概要が見えている。そんな状況かなと思っています。

2 番目は北条氏の志向。決して全国一律ではなく、大名毎の歴史的背景、大名の権力の性格などを反映して、非常に個性がある。単なる個性ではなく権力による志向、自分たちの意識をそこへ出しているのだ、という発想でものを考えていきたい。

ただし、色々な個性はあっても、実際に見てみると全国レベルで大名クラスの館だったらこういう要素があるねっていう普遍化される部分がかなりあって、一方普遍化されないような部分が多い。特に今回発掘されている部分は、館の中でも奥の部分と呼ばれているハレな世界の中でも知的な要素をかなり持っている側の空間です。ハレな表の空間以上に奥の部分は、個性を出しやすい。むしろ出す。主張することによって、自分たちの主張や権力の特徴やそれを誇るような、そういう傾向があるのではないかと思います。表の世界はどこでも似たような型にはまったものを造ることに意味があるが、奥空間は逆方向でそこに意味をもたせているのではないかと思います。

もう一つはどこまで普遍化できるかですが、色々な発掘例を見ていきますと、元々守護権力を持っていた守護系的大名と、ここもそうですが一乗谷のような朝倉氏もそうですし、下克上で突然権力を握ったような大名のところで、館の造り方や今見ているような奥空間の作り方が非常に個性的で両極端に出てくるのではないかと。そういったものをどのように選んでいくのか、ということにももう一つの意味があると思います。

3 番目は、城下町、ここでいえば小田原譜代の城下の部分と領国の中での権力ヒエラルキーみたいなものが、館の構造、実際の景観の中に顕著に出てくる、と思っています。ハレ空間の中で、発掘によって遺構が扱いやすいということもありますが、庭園遺構についてその特色が強く出るらしいということが分かっていると思います。庭園は権力を象徴するものであり、一つの都市という小宇宙の中でのヒエラルキーを示し、小田原のように関東一円を支配した大名の小田原領国の中での小田原方の本宗家としてのヒエラルキーをきちんと表すものだと思います。

一乗谷のようなところは、ひとつの都市の中でのヒエラルキーがよく見えるということが発掘によってよくわかっています。館、武家屋敷、町屋まで各屋敷を掘ってわかったことです。一方、残念なことに、一乗谷に集中していった年寄衆や内衆という譜代を含めた重臣たちの在地での館が一切掘られていません。彼らは一国一城の主なので、地元へ帰って地元でそれなりの世界をもつのですが、比較検討ができない。小田原の場合は、本城、八王子、鉢形でも掘られています。更には津久井城のような国人衆クラスの城も掘っていて、関東一円領国の中で比べることによって意味が見えてきます。小田原の調査が優れているのはここになります。

そこまでやれるところは他にない。この見え方がどこでも通用するかどうかは別ですが、ひとつの良い例として小田原北条は全国区で意味を持っている、ということにな

ります。

最後、整備への課題は、みんなで議論すれば良いと思います。今回、追加調査が必要だと言いましたのは、今のような問題を語っていくときに、奥空間だけで語れることと、屋敷全体で一つの世界、表の空間、ケの空間を含めて議論しないと言えないことは多分にあるということです。現在掘られている御用米曲輪の遺構群をもう少し掘るための理屈を用意しないといけないので、奥空間のみでいいのかという話があります。具体的、物理的な問題として江戸期の上層遺構があって、戦国期遺構の露出展示が非常に難しい。物理的な問題としてどう解決するか。この辺が今後この委員会が中心となって議論をしていく内容だと思います。

私のもととやりだしたのは、戦国時代の越前を支配した大名の朝倉氏の一乗谷で、朝倉氏の館の発掘からでした。現在、整備された状況をご覧いただけていますが、館一つがそっくり発掘されて、礎石建物で諸要素が、全部発掘で見えたのは、おそらくここだけです。ここだけだから全国区で通用するけれど、それがすべてかどうかという、また問題があります。そういう意味でも、この御用米曲輪は意味をもっている、ということになります。この時期の大名館一つを掘ってみますと、このような形で出てきます。西側に正式な表門、広い庭があって、いくつかの建物があります。

この時期の空間の構造として、模式図的にはこんな風になるのかなと思います。主殿を中心とする広庭と主殿のこういうセットが表の空間ということです。儀礼空間の性格が強くなります。

一方、奥の池庭を中心として、例えば泉殿とか対照的な機能を持っている。あるいは、茶室とかの機能を持っている。接客空間としてのハレの空間ということです。北側に台所、湯屋、馬屋とかがある。馬屋も、ケ・日常的なものと、ハレのものがありますので、名前だけで単純にはいきません。

私も長くこのモデルで世の中全部語れると思っていたのですが、色々と考えてみるとおかしい、ということになってきます。一乗谷朝倉館に足利義昭が来た時の記録が二種類ある。義昭側が記録した型にはまったメニュー通りの記録と、朝倉氏側が地元で記録したものがあります。大きなプログラムは変わりませんが方々に違いがある。

問題になっているところと言うと、内容は一緒だが場所の書き方が全然違う。型にはまったほうですが、第一部、寝殿で式三献をやった。寝殿は後でいえば主殿という新しい言い方になりますが、古い言い方、正式な言い方は寝殿での式三献となる。次に会所で、酒肴の供宴がはじまって、一晩宴会をやったらさよならとなります。こちらは内容は一緒なんです、場所の書き方が全然違ってきます。最初に二条が来て控えているわけですが、そこを表ノ納戸と呼んでいます。第一部、寝殿にあたるところの書き方、端ノ間、貢馬間という表現で出てきます。第二部で会所は、奥ノ座十二間とでできます。奥ノ座とあるから表だとか、奥だとかが対立的に使われる。そうすると、私たちは、この時期の建物、ハレの世界というのは、主殿、会所があって庭があって、広庭が付いて

いて、というもので構成されているのだと、普通名詞的な言い方で捕えてしまう。ただし、実際に各地の資料を見てみると、一乗谷の表の御殿、奥の御殿、これが主殿と会所の部分にあたる。元々は主殿と会所に造ったものではないらしい。基本的に呼び変え、もともと自分たちが持っていたこういう財産を、将軍が来るからしょうがないね、と中央では寝殿と会所でやるらしい、じゃあここでやったらいいじゃない。中央でも会所はもともとそういうものだったようで、常御殿を行事があるごとに、会所と読み替えているので不思議じゃない。朝倉だけだと思っていたが、豊後府内、大友の館では、この部分を大表といっている。だからここでも、主殿にあたる部分を主殿と言わずに、表と言っていたらしい。また八戸の根城の方、南部の本拠ですが、ここでも奥の邸と呼んでいますから、ここでも表と奥があり、それぞれ表御殿、奥御殿という使い方が普通にあっただけで、ということが分かったんです。大名がそれぞれこういう装置が必要になったときに色々な要素を導入していく。その時に、既にこういう財産を持っている大名は、やらなかったが、このような財産を持たなかった大名は、直輸入で京都的なことをしていたのではないかと。主殿と会所というのは名前の通りに入れたのではないかと。持たざる者の代表例は、小田原北条ではないかと思いますが、関東公方の義氏が来た時の記録を見てみると、寝殿と会所でしたか、記録はまさに正式な言い方ですね。これは正式なフォーマットに合わせた書き方なのかと思っていたのですが、八王子城は、主殿と言う呼び名が江戸時代から使われています。江戸時代には主殿という呼び方はされていないので、江戸時代から呼ばれたわけではないので、もともと小田原北条の世界では主殿と会所と呼ばれていたのだと思います。もともと持っていなかったがために、東国の中でそういうものが生きているのではないかと、という風に思うわけです。

今回の御用米曲輪がその状況にあります。発掘した遺構について、先程も触れたように、庭を含めて個性的でありながら、その裏に隠れている普遍的な必須要素を持ち合わせている、というのが大きな意味での構成です。例えば、奥空間の会所・台所・湯屋が庭園とセットになってあるということですね。実は、朝倉館と同じ要素が同じようにくっついている。囲炉裏のある大きな台所、池に面した泉殿・茶室、竈の施設まで持った湯殿がある。会所と台所、客が行ける範囲に湯殿を置いていて接待をしやすくしている。中心部の構成は、一乗谷の構成と全く一緒であることが分かります。大名館にとって必須項目は、形はいろいろだけれど大体持っているのではないかなと思います。

朝倉の場合、一段高い庭園、離れのような庭園をもっている高台がでてきて、おもしろいかな、と思っています。

御用米曲輪の池庭の2番と私は読んでしまっていますが、池に面したところに、おおきな掘立の穴を持つ幅が1間しかないやたらに変な建物が出てきます。今考えているのは、棧敷殿ではないかと思っています。都では、大通りの、年中行事で祭りの行列とかを見物するために、屋敷の築地をちょん切ってしまって吹き抜けで、一段高い高床式の宴会場のようなものを造った。これと同じようなものではないか。この場合は、外との

境があるので、床下、塀で閉じていますが、下に砂利がずっと入っていますので、吹き抜けになっていて床下を外したらそのものじゃないかなと思っています。特異ですが、朝倉館の湯殿のところが高殿とよばれているので、高台に置かれているのと同じように、戦国期では景色がごちそうという世界があります。高い所から色々な景色を見せて、もてなすようなことをしていたのではないか、人をもてなす場としてひとつひとつの建物には意味がありました。

例えば早雲が関東へ来る前に管領へ挨拶に行った時も、わざわざ山城の高い所で接待を受けている。琵琶湖の景色を見て、素晴らしいねって言って歌を詠んでいる。江戸城へ来たら、富士山を見たりして、すごいねってやったりしている。これが高殿の接待。栈敷殿的なものがわざわざここにあった。他の建物群だったら礎石だが、これを礎石にしたらひっくり返ってしまうので、しっかりした大きな掘っ立て柱を立て、下は砂利敷きにするという大変特殊なものをもっていった。奥は、個性を主張する、個性的なことを誇る、という世界でした。大名にとって、お前のところとは違うだろ、こんなに面白い世界をつくったという、これ見よがしに使う、そういう世界だったのではないか。

もうひとつ、庭園を各地で見ても、館と庭園は個性がありますが、大きく二つの傾向があるらしい。

朝倉館のように、下克上系の統制的な空間。小規模な池、石組みを重視して建物と一体になっている。池の上に建物が張り出して乗っかっているし、茶室のような座敷も池の縁石のところにまで広縁のような土台をつくってここで鑑賞できるようにしている。建物、庭園が一つの空間として機能するような形で池庭が用意されている。石組も景石だけで組んでいるような池庭になっていると思います。

一方、守護系大名の館。大友館の例でいうと、大きな方眼の街区のなかの一つの街区としてつくられている。土塁や堀をもたず、筑地塀でこれが区画されている。特徴的なのは、南半分のところで、広い砂利敷きの庭園が造られています。それを鑑賞するための建物群は少し離れているところからこれを見る。石組というよりも土羽や州浜というような砂利敷きのそういう構造、傾向が強く出ています。この二つくらいに大きく分けられるのではないかと思います。先ほど見たように、正門が東側の大門に沿ってありますが、砂利敷きの空間、通路、そして正面にメインの建物・主殿がある。これが大表だろうと考えています。文献でも大表と出てきます。会所の部分は残りがあまりよくないのですが、砂利敷きがあるところがありますので、そこではないかと私は考えています。

こういったものを見ていきますと、権力のアイデンティティ、自分たちの権力をどのように表現するのかがよく出ています。福島県の柳川、仙台藩と新潟の佐渡ぐらいを結ぶラインより西側を発掘すると、皆、庭園をもっています。これより北の世界は発掘をしても庭園は出てきません。庭園という大事な要素も持つものと、うちはいらない、という世界があるということです。庭園だけではなく、池庭とセットになって、儀礼に使

われる「かわらけ」、重要な建物に使われる礎石が南には共通しています。これより北では、掘っ立て柱しかなくて、池庭のない、「かわらけ」は使わないということが、大きく違います。面白いことに、伊達の本拠である梁川城は、どっち付かずです。池庭と「かわらけ」は使っているけれど掘っ立て柱はないという世界です。これより西側の赤字のところでは、守護系のバカでかい庭園と館の南半分に砂利敷きを持っている世界になります。黒字のところは、どちらかというところと下克上系で小さな池庭と建物がセットになっている構造の庭園ということが分かっています。

ではなぜ、下克上の典型のような北条氏が、こっちなのかという話になりますが、関東の覇者を目指す北条氏が、権威を上げるためにとった手段の一つであると考えます。都や東国の旧制的な権威を徹底的に利用している。その一環として下克上の庭園ではなく守護系の伝統的な庭園、京都系のかわらけを入れる、都市は府中的な都市景観を持ちたい、持つことによってそこに自分の権威を表したい。それらの志向がはっきりと見える北条は面白いと思います。

さっき言ったように空間構造について、都市の中での階層的な庭園はどういう意味を持っているか、城戸ノ内、一乗谷の朝倉館を中心とする中心部の例を見てみます。構造を見ると、一段高いところに英林塚と言って、朝倉氏の初代の墓があります。先祖の墓に守られるようにして朝倉館があつて、馬場があつて、その外側にうち衆年寄衆と言われる重臣の間口が 30～40mある大きな武家屋敷が並んでいます。さらに外側に、小さな武家屋敷、町屋、寺院群というものが広がっています。

そこで池庭をもっているのは朝倉館、南陽寺、湯殿址庭園、中御殿、諏訪館。いずれも朝倉の宗家にかかわる遺構群で、それに関係する寺や屋敷以外は池庭を持ってない。池庭を持つための明確な規制が行われていた。そのほかのところにある武家屋敷では池庭ではなく、平庭です。どちらかというところとお茶の庭です。明確に権力構造と庭園というものが関係していることが分かります。

ここだけでなく、もう一か所例を出すと徳島、阿波の勝瑞の例です。阿波の守護・細川の館があつて、それをしのぐ大きさの三好氏の館がある。細川館は、大きな池庭で、玉砂利のきれいなものが敷かれていて、距離があつて、土羽などを使った典型的な守護の庭園だと思います。

一方、三好の館は会所みたいな小さな建物があつて、枯山水が発掘されています。あれだけ力のある三好でさえも、主人である細川の館に対しては、それよりも一ランク下でないとやれなかったと気が付きます。

もう一つは北条のすごい所は、小田原北条だけではなく領国内でこれを議論できることです。できればこの整備だけではなく、八王子城、鉢形、津久井などまで連動する形で、小田原北条の領国ではこういう形で、遺構群からも意思が測れるのだということまでやってほしいと思っています。八王子城・氏輝ですが、主殿は最先端の形で、90年代のこの時代に東国ではまずない。ここから後の時代になってはやってくるものとな

っている。両方から使えるように山裾にこういう庭園が広がっているんだという、御用米曲輪とは全く違ったスタイルの構造を持っているというのが特徴です。庭がこんなに違いますが、石の配し方が似ていて同じ系譜なのではないかと思われることがあります。さらに面白いのは、城下で発見された服部さんの屋敷で出た庭園は、さらに興味深く、縁の石を立てて、敷石を敷いて庭を作っているということです。一方、津久井城では、内藤氏の屋敷で同じ様に縁石を立てて平石を中に敷いて、そこに大きな建物を建てているという構造です。こういったものを含めて御用米曲輪、氏政邸が分かっていたことによって、どんな歴史が語れるのかということを意識して整備をしていってほしい、その方向でやりたいと思います。

イ 中島部会員発表

中島部会員

私は、卒業論文・修士論文では、金融・高利貸しなどを取り上げていました。その後、中世の貨幣のことをやるようになって、そのころちょうど各地での発掘調査から出土銭貨の研究が盛んになって、出土銭貨研究会ができてそれに加わるようになって、考古学との接点ができました。国立歴史民俗博物館の共同研究に各地に同行するようになって、遺跡を興味深く見るようになりました。発掘で出てきた遺物から豊かな成果が描かれる。そういうのが非常に面白く思っている延長上に、御用米曲輪で面白い遺構が出ていることがありました。以来、発掘の節目に小田原に通っていました。

史料編纂所に勤めていたのが、慶応大学に移って学生を教えるようになりました。こんなに面白いものは是非学生にも見せてやりたい、ということで、夏と2・3月の年2回、ゼミ合宿・旅行を催しています。事前に現地の教育委員会に相談をして発掘調査の案内を受けるようにしています。朝倉・上杉・伊達などの世界を、発掘調査されて遺跡がある現地へ行って、実際に歩いて、「歴史が復元されてきているのだ。こういうものが出ているのだ」というものを体感してもらっている。御用米曲輪の整備に関わることで、整備のお手伝いができたらと思うとともに、学生を連れてきて勉強に役立てる整備ができたらという気持ちがあります。

私自身、中世史が専門ということもあって、小田原城が戦国大名を代表する小田原氏の本拠ですので、近世よりも中世を復元してもらい所ですが、制約があるかなとは思っています。

近年の整備の仕方、一乗谷でやっている立体復元とか、バーチャルリアリティを援用して、など色々ありますが、わかりやすいのは立体復元なのだろうとは思っています。建てるのにお金もかかりますし、一回やると修正が利かなくなる、という弱点もあります。自治体側には、一度整備してしまうと経年劣化が起こって、補修・造り直しなどお金の問題が出てきます。実は、経年劣化は、教育の立場で言えば良い教材になります。

秋田県横手市に鳳山遺跡と少し北に弘田柵があって、中世の頭・古代末の重要な館遺

跡があります。年代順に秋田城の跡を案内してもらいました。官衙遺蹟なので、前に築地塀が造ってありました。10～20 年経っていてだいぶ古かったので下の方が掘れて行ってしまった。生の経年劣化を学生に見せることができた一例です。律令国家という立派な官衙とかをつくったが、経年劣化は避けられなくて、お金をかけての補修・建て直しが必要になる。そういうことをしてまで、中国風の国家の在り方を体面として維持する意欲がなくなったから、律令国家は 10 世紀になって解体してしまうのだ、ということを知りやすく示せて、学生たちも折に触れてその様な話をしてくれるようになりました。立体復元で整備側のお金はたいへんかかりますが、傷んでしまうことは、実は、結構大事な教材なのだという事です。

ウ 小沢副部長発表

小沢副部長

近世住宅史が専門です。城郭の御殿とか天皇家の御所とかを専門にしています。発掘遺構を基にした復元整備事業にいくつか関わってきました。中世以前はとにかく資料がなくて制約があるかと思いますが、近世なので比較的資料はあり、復元検討委員会にかける城郭系に関しては、写真と遺構が揃うことが条件にあり、ものによっては建築遺構も残っています。部分的に遺構表示をしている整備をしたりもしていますが、基本的に私は建築が専門なので、建物の具体的な立体復元の方になります。こちらでは、建物の復元の可能性はないと思いますので、遺構を整備していくうえでの疑問とか課題と考えていることなどを発言していきたいと思っています。

佐賀城の本丸御殿で、非常に恵まれている例の一つです。写真が複数枚残っていました。

基本の建物はのちに小学校になります。小学校舎の一部に転用されて、更には移築されてこの部分だけが残っていました。この巨大な本丸御殿の中で、写真が残っていたのは青の部分だけで、建物が現存していたものも赤の部分だけということになります。そうすると建物全体を理解することが重要な文脈になってくるとしています。佐賀城本丸御殿は天保期の建物になりますから、天保期が復元年次になります。地方性があるというお話がありましたがほかの住宅御殿に比べて建物の呼び方がかなり変わっていて、御料理御殿、料理の間であったり、屯の間などがある。そうすると、建物全体を理解しないと、これらがどういう機能をもった建物であるとか、仕様など決めることができない。佐賀の場合には儀式の記録をまとめたものもあって、このなかでどういう機能として使っていたのかを年中行事のような記述から推測するということをしていきます。どこを誰がどう使ったかということでヒエラルキーのようなものが分かってきますし。それでも出てこない所は、大量にあります。奥向きの中では、建物が残っていた部分以外の、本当の奥の部分は全く記録に出てこないのので復元はまったくできなかったんですね。建築は使ってなんぼですから、何の機能のために造られ、なぜそこにあるのか、という

ことを理解していくことが、遺構であったとしても重要です。上は移築、下の外御書院は完全復元したものです。当然、類例として残っていた建物は使いますが、全く機能が違う建物なので、木張をそのまま使うこともできない。これを用途を加味しながら復元していく。こうやって機能や位置を考えていくと、この場所に整備をするからこそわかることがたくさん出てきます。

栃木県足利市の足利学校の例です。聖廟は残っていて、学校部分は絵図が残っているのですが、再建する時に幕府に提出した仕様書があって、その二つによって宝暦年間の姿に再建して見せる。発掘の遺構が出ていて庭も出た。これを実際に復元してみると、付け書院の先に建っていた聖廟が、書院の窓センターにぴったり合う。従って書院の窓から見る事ができる。先に聖廟があってこちらを建て替えていますから、偶然当たったのではなく、当てて何が見えるかを考えたうえで建てている。この間に庭園があって、その向こう側に一番大事な聖廟が見える。これが遺構整備の醍醐味だと思っています。同じ場所に立つからこそ、当時の人と同じ体験を共有できる。位置とか、今わかっていることだけでも理解ができる。

同じように長崎出島。今4期目に入っています。2期に復元したカピタン部屋ですが、2階建ての建物で、平面図も残っている。実際には窓が左によってつけられているところがあります。出島はいくつもの建物が連なっていて、隣接する建物との空間を考えて、稲佐山を綺麗にみる工夫をして付けられた位置取りということです。今、埋め立てされて周囲は高い建物が建ってしまっていますので、地面のレベルでは、ほとんど稲佐山は見えない。しかし二階建ての高さにすると、窓からは額縁のように景色を見ることができます。さきほど、足利学校は、既存の建物との関係で位置が決まっている。周りの地形や町の景色と合わせて位置を決めていく、仕様を決めていく、ということはある。特に今回の場合、庭がありますから、庭をどこかに置いて背後に何が見えるのかが重要になってくると思います。発掘で出てきているものの配置や、何なのかを精査することが肝心です。私たちは目に見えるものに引きずられてしまいます。御用米曲輪の場合、庭が素晴らしいので、引きずられてしまう。庭が出ていると庭が正面のようになりがちですが、実は、会所という建物が庭の正面ではない可能性があります。あの建物は石段が6尺2寸5分でできていて、一か所だけ南北方向のほぼ中央が7尺2寸になっています。一か所だけ広い石段があるとすると、こちらが正面なのではないか。かぎ型にぐるっと庭を回った向こうに正面が来るということも考えなくてはいけない。そして、会所から真東を見ると、そちら側には何が見えるのか、ということも会議として重要になってくる。敷地の広い範囲を含めた理解をしていきたいというのが課題だと思っています。とにかく全体像を把握したうえで整備を進めることが最も大事なことです。

出島全体像をみると、今復元されているところでカピタン部屋、商館長の建物中で、ただ住宅だけではなくオランダ商館の行事も行うようなメインの建物になっていて、その隣にヘトル、副館長の建物になります。どれかを選ぶとしたらカピタンとヘトルとな

るんですが、この復元は 2000 年に日蘭交流 400 年に当たる年で、それに合わせて建物を完成させるというミッションがあり、普通だと整備の優先順位としてはこれが一番であると候補に挙がりました。しかし、この当時出島はほとんど公有地化されていたのに、この部分は数少なく公有地化が遅れていたもので出来なかった。苦心の末、2 期に分けて行うことになりました。ヘトルから掘るということになった。攪乱されていて出なかった。北側の蔵とか建物の部分は位置が決まるほどの遺構が出ました。規模は色々なものを書いてあるので当てることが出来ますが、ここは位置を当てる手掛かりが 0 でした。どうしたかという、図、指図、写真の解析によって建物を置く位置を決めて、2000 年に建てました。そしていよいよ、カピタン部屋のところの土地が購入できたということで、2 期が始まって、西よりは攪乱されていて遺構が出なかったのですが、東側は遺構が出ています。整備が進む中で、発掘で出てきた遺構に平面図にあてていくとヘトル部屋を建てたところぶつかってしまった。新聞に取り上げられ、遺構の位置の関係で訴訟になるかも、ということで大騒ぎになったこともありました。様々な発掘調査の結果から、幸いなことに明治後期の建物の基礎ではないかということで近代の遺構と推測されたので、下まで掘り下げカピタン部屋の遺構が出て、無事に位置を決めて復元することができたということがありました。建物群であるものを。建物の一部だけを掘って理解するのか。残った一部だけを掘って整備をしてしまうと間違いが起こりかねないので全体像を把握してから整備がしたい。ということを経験として持っています。

出島は、整備年次をどこに充てているかというと、1798 年に大火があつてその後再建したという姿になっています。それは資料的な制約があつて、カピタン部屋の平面図、出島模型、写真が残っていて写真解析から高さまで解析できるため、居住地編入までを復元年次を取っています。居住地時代に建った建物も存在していて、明治 11 年出島神学校、明治 13 年内外倶楽部、明治時代に移設された出島橋、ここが近代エリアとなっている。2000 年に、「出島の完全復元」を打ち出してしまったために、今、出島は揺れています。時代が混ざって完全復元にならないからと、移築して完全復元をする派と、歴史は積み重なってできているのだからと、出島は江戸時代にオランダ商館があり、後に居住地となってこの建物が造られたとして、その証もここに残すべきだという派に分かれてしまっています。どちらが正しいかは難しく、観光客は出島の洋風な部分を目にとめやすく、理解を間違える可能性があります。

私は、ある土地がある歴史を経て積み重なってできているという要素は整備の中にあってもよいと思っています。小田原城全域としては基本的には幕末の姿が全体としての復元年次になっていますから、あの部分だけを完全に北条期に復元すると齟齬があるのは確かです。理解として間違わないようにするには、どう行うかが最大の課題だと思います。

全体が分かってからやった方がよい、年次が混ざるものをどう表現していくか、この結論が出てから御用米曲輪の整備をやった方がよいと思います。今は、土塁は近世の姿

で復元しましたが、そのついでに、今北条期遺構が出ている一つの部分だけ近世の遺構で整備をしてしまっている。このエリアの中にも近世の遺構が入っていて、それが今後大変なことになるのではないかと思います。今後全体像を見直しながら整備をしていきたいと思っています。

エ 宮内部会員発表

宮内部会員

私は、親委員会にあたる史跡小田原城跡調査・整備委員会の委員として2003年、2004年くらいから関わっています。主に植栽を担当しています。御用米曲輪だけではなく、小田原城跡全体の植栽について調査等をさせてもらっています。小田原城跡は樹木が繁茂してしまっていて、何とか整備しなければいけないということでした。例えば「小田原城跡の外から見ても、本丸に入っても天守閣が見えないよ」ということがありました。御用米曲輪北東土塁についても、今はだいぶ減ってきましたが、当時は、高さのある沢山の楠木が重なり合っていて、反対側の土塁の斜面にも落葉樹だけではなく何故かスギやヒノキなどの針葉樹まで繁殖している大変な状況になっていました。少しずつ整理してきて土塁上もすっきりしてきました。まだまだ、幕末期・江戸時代の城として機能していた時の植栽とはかけ離れた状態だと思います。全く同じ植栽の状態に戻すことは、なかなか難しいのですが、そういう整備を経て思ったのは、やはり「ほったらかし」は良くない。荒れ放題にしないように、剪定していくの植栽整備をきちんとやっていくことが大切だということを痛感しました。

御用米曲輪の戦国期の整備をどのようにしていくか、会議を通して考えてきていることをまとめました。4つに分けました。

- 1、池遺構と、今はありませんが鉄門の登路、近世遺構との整合性をどうするのか。
- 2、庭空間の植栽整備をどうするか。
- 3、庭園内から外部空間への眺望。
- 4、江戸時代ゾーンとの境界はどうしていけばよいか。

1について、第一回の会議でも出ました、鉄門の登路の下に埋もれている遺構の確認をどうするのか、ということが気になっています。小沢先生からご指摘があった通り、そこだけではありませんが、全体が分かってからというのは重要なことだと思っています。池の庭、2号池と言っていますが、入り込んでいるのは明らかなので、その広がりがどうなっているのか気になるところです。仮に発掘調査ができて、戦国期の遺構が確認できたら、近世遺構との整備の兼ね合いをどうするのか、難しい問題が残ります。今の段階では、幕末期・江戸時代の整備が基本になっていますので、鉄門への登路は現状のままで御用米曲輪の整備は行われるという方向で進んでいると思われますが、小沢先生がご指摘の通り、もう一度考え直す必要があるのかどうか、お話を聞きながら考えていたところです。もしそういう整備を行うとなると、2号池が切断されて整備をする

ことになりますよね。戦国期建物からの背後の景観をどのように処理していくのかというのは、非常に問題があると思っています。発掘時の写真を見ると樹木の繁茂しており、当然戦国期の状況ではないです。江戸時代にも、こうなっていなかったでしょうし、戦国期からは地形も変わっていただろうということから、どうしたら良いものかと思います。まずは、樹木は整理していく必要があると考えています。ここは重要な検討課題かなと思っています。

次に、2の庭空間の植栽整備についてです。実際、何か木を植えるかという点と難しいと思います。何がどの位置に生えていたのかということは全く分からないわけで、花粉分析から椿族とか楓族とか柿族とか出ているという話ですが、花粉は飛距離があるので、参考資料に過ぎないということになります。ここに柿の花粉が出たから、ここには柿を植えましょうということにはならないということです。植えるとむしろ誤解を招いてしまうことになりかねないということです。この庭園部分は、石板を敷き詰めたところが多い。植栽って実際には少なかったのではということも考えられないかな、と思ったりもします。

庭園は鑑賞目的のものという方向が復元を考える中心になると思いますが、管理面は考えなくてもよいのかと思います。推測ですが、雑草を抑えるとか、庭園管理の面で工夫とかって考えられないか、鑑賞面だけではなく実用面の検討もあっていいと思います。

3ですが、建物内から庭園の眺望についてです。戦国期建物の床面の高さに合わせて、庭園空間を眺めるような仕組みを作ってはどうか。小野先生の一乗谷・朝倉義景館跡をつい先日庭園学会で見学しましたが、中央に花壇の遺構が出てきているということですね。泉殿があって池庭を見ました。そこにあったのですが、当時の床の高さに合わせて設けられた台ということでしょうか。

小野部会長

正確には同じ高さではありません。高くなって目立ちすぎる。補足すると今やっているのは、400年前の礎石の上や庭石の上をズカズカ歩いている状況です。遺跡が傷むので、保護する形でガラスパネルを使った当時の通路を復元することによってそこから見よう、と。庭の鑑賞、その範囲について部屋位の単位で、奥座敷・泉殿については床張りをする形でやろうということになっています。本来の高さにすると色々な問題が出るので、なるべく管理はできるけれどそこまで上げないという形で調整しつつあります。

宮内部会員

ありがとうございます。こういったことが参考になるのかなあとと思います。こういうところに上がってみると視線が高くなるので、実際の高さとは違うという先程のお話でしたが、当時の人が眺めていた同じ様な視線から鑑賞できるようになります。今回の場

合はおそらく発掘された遺構をそのまま展示するということではないと思いますので、遺構を痛めることはないと思いますが、そういうのに役立つ工夫かなと思います。

もうひとつは建物の性格や板碑との位置関係、正面の位置が推測できるのかということで、小沢先生から足利学校の書院から聖廟が真っ直ぐ窓が見えるとお話がありました。では、戦国期の建物の中から、これはどういう風に見えたのか。また小野先生の話から池2に近い建物は棧敷殿かもしれないというお話がありましたが、そこからどのように見えたのか。それも含めて主殿・建物の方から池2の景観はどんな風に見えたのか。あるいは、どういう方向から、どこからどういう方向に見せたのかということが非常に重要だと思っています。正面となる場所・方向を検討していきたい。それが明らかにならないと庭園景観の復元は難しくなります。そういう意味でも、1の鉄門の部分はどうか。あちらが正面ということになるとおもいますが、あるいは正面でないにしても重要な部分があるのかなと思っています。

4の江戸時代ゾーンとの境界部についてです。例えば何らかの柵を設けての遮蔽は、来訪者に年代的な誤解を与えるのではないかとと思っています。当然、現在の素材・プラスチックなどを使うことはないでしょうけれど、仮に竹垣であったりしても、その時代にあったものではないと思いますし、筑地塀にするのか、あるいは生け垣にするのか、いずれにしても年代的に誤解を与える恐れがあるのではないかとと思っています。あるいは柵を設けることによって、戦国期、江戸期どちらにしても実際には異なる閉鎖的なイメージを与えてしまうのではないかとと思っています。戦国期においても、まだ発掘されていないところでもっと広がりのある庭園というか館空間が展開されていたと思うのですが、そこに何らかの塀を造ってしまうと、「昔こんなに狭い所だったのかな」と見る人が思ってしまう可能性があるのではないのでしょうか。逆に江戸期の米蔵の方から「狭いよね」というイメージを与えてもいけないと思っています。では、どうしたらよいのか。例えば、路面に高低差を設けるとか、別の被覆素材にすることで年代の違いを表現するとかの程度なのかなと考えています。江戸期の方は、クラピアという植栽で一面を覆うことに決まったようですが、戦国期では、そういうものを用いないように被覆などを工夫した素材を改めて考えていく必要があります。発掘で出てきているような石板と砂利敷きとにしていくのか、どうしていくのかということも検討課題かなと思っています。

戦国期においても、御用米曲輪の庭園遺構はかなり特異なものだと思います。同時期の他の庭園とも比較して、特異な点を視覚的に理解できるような展示を期待したいと思っています。小野先生のお話にあった東国というか、小田原北条氏とその周辺諸国の統一感が出ていると思うので、その地域性・個性といったものをより正しく理解できるような、広がり深まっていくような展示ができるように検討していきたいと思っています。

オ 高妻部会員発表

高妻部会員

用意した資料は、宮内先生からお話があった庭園学会でのお話や奈文研の研修でのものを集めたもので、御用米曲輪で重要になるようなところを中心にお話していきます。遺跡の保存活用の必要性については皆様充分ご承知の通りですが、遺跡の場合、発掘調査して埋め戻しをすると野原になってしまうので、ここはこんなに重要な遺跡があります。大事にしましょうと言われても、何をどう大事にして良いかわからないことになります。展示や資料館やガイダンス施設などを使って活用していかないと保存は語れないということです。ベスト保存を含めた遺構の表示は非常に重要になってきます。保存と活用が両輪となって、遺跡の保護が図られます。

遺構の劣化には物理的な要素があります。露出展示をする時や出ているもの、石造物を展示するときには、物理的な要因が大きな劣化の原因となります。簡単に見ていくと、乾湿繰り返し、凍結破碎、塩類風化の3つというのが代表的なものです。石というのは固いものですが、非常にもろいものです。倒されてそのままにしておくと風化していきます。乾湿の繰り返しの代表的なものは、熊本県熊本市の七本官軍墓地があります。乾湿を繰り返すは、石が湿気を吸って膨らんで乾いて縮んでを繰り返します。層位に沿うだけでなく、層位に沿わないところも、壊れてくる。表面から1、2センチのところでもいろんな方向から壊れてきます。これは春先に起こります。

凍結破碎について、資料の写真は鳥取県の妻木晩田遺跡になります。保存処理していますが、一冬でこのように割れてしまいます。もともと丈夫な石だが、土の中で成分が抜けるなどして、発掘されたことで地表に出てくると、石にしみこんでいる水が冬に凍り膨張し、凍結破碎してしまう。

これも物理的な要因によるものですが、砂岩が詰まっている窓枠ですが、長期にわたる応力の集中によって割れが発生しています。高松塚古墳でも応力の集中により破損しました。これは地震の影響を受けて石室の天井石が割れた。瞬間的な破壊です。

次に塩類風化です。石の中を水が染みこんで、ある高さのところで水が石材表面で蒸発するとき、塩類の結晶ができる。表面から剥離するように破壊されます。なので、上はきれいだが、下のほうが壊れる。

次に生物被害ですが、最初は藻や苔が生える。苔が生えると土が溜まる。そこに植物が生える。生えている木を抱きかかえるようにさらに木が生えているような状況もある。植物を切ったらよいとなるが、この建物は樹木によって支えられている状況のため、樹木を切ってしまうと倒れてします。古墳も同様で、古墳に生えている木が台風などで揺られて危険なため切ってしまうという議論があるが、切ってしまうと、石室を支えている木の根が枯れて石室の周りが痩せて、石室が壊れてしまう。

複合的な要因としては平城宮跡遺構展示館がある。ここは遺構をそのまま展示している。覆屋の設計ミスですが、屋根の庇が非常に浅い。そのため、水が降ると、水が入ってくる。周りにしみこんだ水も浸透して入ってくる。内部に水たまりができるほどです。水が入ってくるので、苔が生える、塩類が発生する。いろいろと対応が考えられますが、

この場合は、地面の上にビニールシートを敷き、埋め込んで、入ってくる水の距離を長くする。今実験的に行っている。

遺構の保存を考える時は、遺跡と石造物とふたつ挙げているが、遺跡の場合は発掘して処置する。発掘や埋戻しの段階で気象環境や土壌環境などいろいろと調査ができる。調査でデータを集めれば、整備、活用の方法を考える材料となる。このデータから予測や判断の材料とする。埋め戻して保存していいのか、露出展示ができるのか、それをするには環境改善をしたらいいのかなどである。また維持管理についても状況観察や環境調査を続けて劣化予測をしていく。そしてまた対策をすることが必要です。石造物についてもだいたい同じです。

今回は御用米曲輪にはどのようにしていくかだが、庭園は名勝であるとされてしまうと露出展示をすることになる。庭園という史跡となれば、埋戻しをして意匠の研究をして表現していくことができる。再現、復元したものが、だんだん傷んでくる。中島先生の話にありましたが教育的に意味があるということでしたが、良いないことであります。予算の問題があると思います。維持管理で、小さな修復を繰り返すことで大きな破損を防ぐことができる。20年ほったらかしにしておくのではなく、5年に一度土堀の下を直すなどしてほしい。

再現した場合、どの程度のものを作るのかということになる。また本物を展示するにしても、どの範囲で露出するかということになる。埋め戻して保存することにしても、本当にその環境でよいのか、検討する必要がある。今までは埋め戻したら前の環境に戻るはずとされてきた。希望的観測でしかなかった。土の中の環境を計測し、埋蔵文化財の保存の観点からこれから重要になる。

具体的には、診断調査で得られる庭園遺構の構成材料の物性値や環境データからシミュレーション解析をする。今現在起こっている劣化現象が何なのかを検討することができるようになってきた。その結果を解析して、実験室内で再現し、本当にそういうことが起こっているのかを検証することができる。同じことが起こるのであれば、何を改善した問題が収まるのか、検証することができる。

保存対策としては、環境改善、環境対策と似ている言葉があり、わかりにくいと思う。例えば、雨が降る。雨によって劣化するのであれば、雨が当たらないように屋根をかける。物に対して直接手を加えない。これが環境改善。環境対策は、例えばイースター島のモアイ像に屋根をかけるのは、景観が変わってしまい、誤解を与えてしまう。なので撥水材を噴霧する。雨水が石塔に浸透しにくいようにする。これが環境対策。

遺跡の最新事例として、大分県のガランドア古墳があります。大正時代だったと思うが、鉄道敷設のため、古墳の土をもっていつてしまった。大正時代までは墳丘があった。中に装飾がある。赤とか緑である。それが痛んできている。2007年くらいはブルーシートをかけて、雨が入らないようにしたが、剥離が起きている。もともとの地質構造は河原の上に堆積層があり、そこに古墳を建てている。この土の下には大きな礫があり、

礫の層が上に水を上げない。川の水が下を流れているが、上に上がってこない。周囲に降った雨が、石室にしみこんでくる。であれば周りに雨がしみこまないような覆屋を建ててあげれば改善されると仮説をたてた。仮説は仮説であるため、なかなか信用されない。ではということで、いきなりドームを作るのではなく、木造の小屋を建てた。これにより、雨水を遮断し、断熱性をよくし、データをとってシミュレーション解析をした。これで中が乾燥した空間になることがわかった。中を低温で乾燥した空間にしましょうとすると、現代人は空調を入れようとなるが、この場合は空調を入れず自然換気をしている。自然換気でシミュレーションをした結果、麦わら帽子のような形になった。いったん整備すると容易に解体できないので、何かあった時のために、解体できるドームにした。クレーンで分解できる。土の部分は1 m盛土をした。予想外だったのが、羨道が西を向いている。西日が入ってくるので、入口に覆いをしている。今は日立の人にデータをってもらっている。内部の温度湿度、外の温湿度のデータが出てくる。電気を使っていないため、換気口を開閉させる。開閉するだけで中の湿気を逃がす、もしくは中の空気を入れる。電気代を節約するため、人が来た時だけ電気がつくようにしている。3, 4年たったところで、日立の方も把握してきたため、開けます、閉めますと連絡が来る程度になった。

次は大分の元町石仏ですが、もともと覆屋はなかった。史跡指定されて管理しなきゃいけないということで、覆屋を建てました。最初は東屋のようなもので、良い感じだった。10年くらいたつと塩類が噴出するようになった。肩のところと足の部分。冬場になると土が湧き上がってくるような状況になった。調べてみると、冬場に出てくるということで硫酸ナトリウムであることがわかり、水は必ず下からくるので完全には抑えられないと思われた。周りを全てカットして、大地から切り離してしまおうという意見もあったが、遺跡の原則から外れているので、環境を改善することから始めようということになった。膝の部分から塩類が出ています。冬場の朝方におひさまが入ってきて、ちょうど膝のあたりに当たる。これで膝あたりの水が蒸発して塩類が発生する。肩のあたりは、水路みたいのがあるのかもしれないですが、冬場乾燥した環境になるため、硫酸ナトリウムが出てくる。そのため冬場温めてあげれば硫酸ナトリウムは出にくくなるだろうということになった。硫酸ナトリウムがあっても、噴出してくることが問題であった。水に溶けている状況なら問題ないわけです。そのため水に溶けている状態になっている環境を作るということです。それを作るためにはどうしたらいいかというと、覆屋を改修することになった。まず、いつも扉が開いているようになっていて、外気が入ってくる状況だったが、ガラス張りにし、窓も塞いだ。扉は入る時だけ開けるようにして、半自動で閉まるようにした。これにより中が高湿度になるため、木材にカビが生えたり、石膏が出てくることになったが、石仏に影響を与える塩類は抑えられるようになった。

次に平城京左京三条二坊宮跡庭園です。景石がボロボロになっているものは保存処理しないとたないということになった。景石に薬剤含浸する以外にも、これは環境改善

の方ですが、それまでは雨が降ると道路、通路を通過して池に水が流れていくため、石や州浜が削られていた。暗渠を入れてもらって、直接水が行かないようにした。これで改善された。

質疑

小野部会長

色々な立場からのご発言を聞いていて、論点の重なりを感じました。気が付いたところでいくつかまとめます。

1つは、整備をするにあたっては、御用米曲輪全体を知ること。空間的にもそうです。機能を復元すること。

今日の話の中でも庭園が重視されていたが、実はいろいろな施設があってトータルの中で機能しているということ。皆さんのご発言にあった、視角のことや背景としての景観を含めて全体の機能の中でそういう部分も含まれているということ。それを知ったうえでどうするのか、ということが大きな論点だったと思います

2番目は、ここの特徴である、時代の重なり問題です。

すでに近世の小田原城としてのプロジェクトが動いていて、更に、御用米曲輪の中に直接それがダブル様な形で遺構群が出ている。それをどのように共存させていくのか。史跡になってしまっていますから、共存を前提としたときに、1の問題、どのように全体を知って、どのように全体の機能を復元して表現するのかという問題になると思います

3番目は、整備と管理、鑑賞の方法の論点について出していたと思います。

具体的な整備に向かった時に、できてから「どう考えようか」ということではないので、先々の管理を含めて考えていかないとはいけません。手間・人件費・補修費など見越せることを十分に考慮しておくことは当然重要です。最初の整備の時には、国から補助が出ますけれど、その後は全くありません。いかに安くよい整備をするかということが問われます。その辺のノウハウを保存協会さんは、方々の経験の上蓄積されていることと思いますが、経費の面でも「より良く安く」をお願いしたいと思います。

現地の整備をどうするかということをここで議論しているわけですが、それだけではなく、VRの問題、天守閣という博物館施設での展示の問題などがあります。室内で展示するもの、屋外の遺構展示でやるべきこと、それぞれお互いの良い所を使えば良いと思います。整備の中であっちもこっちもこなすのは無理があつて破綻してしまいます。考え方を整理しておく必要がある問題です。

4番目は、活用を前提とした保存整備という言い方にはなりますが、出そうが出すまいが、一方は埋めるにしても、この遺構保存はどちらにしても出てくる、と。その上で上に復元的につくった場合、整備した部分についての活用と保存の問題があつて、両立させるには時間や手間暇をかけてやっていかないとはいけないということです。

共通する議論としては、このようなことだったかと思います。部会員同士、または事務局から何かありますか。部会員の中で、ほかの部会員の発言についてご意見があったらお願いします。

今日は、発掘問題までやって終わりにしたいと思います。

小沢副部長

確認です。時代の重複のところです。年代で御用米曲輪については、土塁は近世遺構の整備がすでに行われている状態で、土塁上にあった御用米曲輪の蔵跡の表示はすでに終了している。平場の部分に関して、今は近世の部分とそれ以前の戦国期の部分の両方を入れる、というのが前提になっていますが。土塁部分は近世遺構の整備になっているので、平場については、例えば全部戦国期のということが、選択肢として可能かどうか。

小野部長

事務局側に既に既定方針があるかどうか、ということですね。

事務局（土屋）

これまでの状況も含めてお話しします。周辺の土塁の整備は完了しています。江戸時代の土塁の復元と蔵跡の平面表示は終わっている。平面部分については、江戸時代と戦国時代のエリアを分けて表示するというので基本設計までは策定をしています。実施設計については、平面部分の江戸時代の実施設計を半分、わかりづらいのですが、半分。平面部分の江戸時代の実施設計のうち蔵跡など詳細な部分の実施設計を除く、たとえば盛土とか、入り口部分、御用米曲輪で言うと南側の堀で仕切られている部分についての実施設計まではつくっていますので、一部近世平場の実施設計は着手している状況です。しかし、例えば、部会の議論、調査整備委員会の議論などで、整備範囲を変えることは可能である。実施設計を作ってしまったところに一部重複が生じて変更が生じる場合には、もう一度検討するための実施設計の費用は、市の単費をもって行うようにという補助金上・制度上のご指導をいただいています。範囲が変わって重複箇所が生じる場合、実施設計を再度作り直す必要がある場合ということですが、そのような予算立てをして話を進める必要があります。それを選択肢の一つです。

小沢副部長

ということは、確認ですが。平場の部分に関しては、今後、今日の議題にもなっている、もう半分の部分・東側に関してもう少し発掘調査が行われた結果、そちらからある程度戦国期に上る遺構の重要な部分が出たとしたら、平場に関してある程度全域を戦国期で統一して整備をする・改めて実施設計を行う可能性はあるということでしょうか。

事務局（土屋）

発掘調査の結果次第ではある。

小野部会長

これは大変大事なことだと思います。宮内部会員からご指摘があったように、色々な形で共存させるのは無理で、むしろ単一の時代にした方が理解しやすい。また、それだけに意味があるということが議論できれば、そういう選択肢は大きな問題になる。見る人も基本的にわかりやすいですね。今後の調査と議論の行方でそれを決めていこう、ということになるかと思います。

事務局（小林副課長）

補足いたします。近世平場には蔵跡があるため、それを壊して整備することはできないと考えています。

小野部会長

もちろん壊してしまうのではなく、蔵跡を埋めた上に整備を市、積極的にあれを見せない形にしてしまっ、戦国期の遺構を中心に表示をしていくということになると思います。

事務局（湯浅課長）

ここからここまで中世、ここから近世というような完全に色分けをして実施設計をしてきていますが、例えば、近世エリアの中に非常に重要な中世のものが出てきたときにどうするかというのはまさにこれから考えるということで。ただ、蔵跡を飛ばしていいかということ、それは具合が悪い。それは、委員会の皆さんとも相談していくことになるかと思っています。

小野部会長

近世エリアから戦国期のっていうのは、元々空間的にはダブっている。平場の真ん中にある2棟の蔵ですかね。あれだけだと思いますので、今ある土塁まで切ってやろうということではない。その意味ではめったなことではないかと思いますが、どういう形で、あの蔵を共存させるのか、埋め殺しにしてしまっ見えなくしてしまうのか。色々な方法があると思います。保存は前提ですが、一番効果的な整備の仕方、私たちが表現したいのはこれだっということが議論できればいいなと思います。

事務局（湯浅課長）

現在わかっている2棟の蔵跡以外にも、今回狙っているところ以外の中間層っていうのが出てくる可能性があつて。少なくとも百間蔵と言われ始めているのが、戦国の末・天正15年位のもので、それが例えば、その間に挟まったらどうするのかなど、近世も百間蔵を継いで御用米曲輪という形になっていると思うので、それがでてきたらどうするのか、とかいろいろなことがあり得ます。発掘なり調査をしてみないことにはここは何とも言えないかなと思っています。今回の地中レーダー探査や発掘調査の成果を見ながら考えるのかなとは思っています。

ここは近世だからもう近世です。それだけです。ということはないと思っています。次の課題の、どうやって時代差のあるものを表現していくのかということなのかなと思っています。蔵を表現しないで蔵を残して中世の面を表現するとか、テクニカルなところでの議論を、今後はしていかないといけないのかなと思っています。

小野部会長

今大学などで、VRのかなり精密な良いものを作っていて、現地へ行って遺構のところに立つと、そこに復元したものが全部自分のスマホで見られるというような仕組みを充実させています。室内と室外、現地の遺構と言いましたが、現地の遺構の説明の仕方にも、決して実物で見せるだけでは無く、良い方法がかなり有効になってきていますので、色々な形でトータルに、いずれそういう議論がしたい。

むしろ天守閣の中に、御用米曲輪の発掘成果そのものを専門的にきっちり展示できるようなコーナーが必要なのではないかという色々な問題がこの辺にかかわって出てくると思います。そういう一体的な議論が最終的にできればよいと思っています。

事務局（湯浅課長）

VRについては、石垣山の話になりますが、市長から「石垣山をVRで出来ないの」と言われています。デジタルに関する理解がある市長なので、そういった技術を駆使するということは、今後の議論となってくることだと思います。

もう一つは、小田原城天守閣の中に展示施設はありますが、博物館がありません。30年来議論をしていて、まだ結実していない最大の課題だと思っています。それで私がここへ来たと思っています。結果が出ていない中で、こういった新しい成果が出てくれば、そういうところでどのように扱っていかうかということになると思います。

現地の遺構の保存の仕方と、そこから出てきた成果の見せ方は、両輪でやるのだらうなと思っています。

小野部会長

一乗谷の新しい博物館が参考になると思います。

高妻部会員の話について、一緒に一乗谷もやっているから、時間がかかるのもよくわかりますが、とりあえず今やろうとしている整備までの時間と、整備後の例えば地中に保存した場合に遺構の中でやっていかなければいけない部分があると思います。その辺についての時間的な見込み・計画性はどんなふうに使分けたいのでしょうか。

高妻部会員

気象観測は、大体2年ぐらいで傾向がつかめると思います。問題は土壌中の観測点です。発掘調査の進捗との兼ね合いがありますし、当然遺構が現れることが起こります。現状変更の問題もありますから。それは、そこを見ながらだと思えます。

今回ボーリングで開けてもらいますが、地下水路を測ります。それ以外で可能であればセンサーを差し込んで土そのものの垂直の水の分布を見るとかが可能なのでそういうことを考えてもよいと思います。

小野部会長

その結論を待たないと具体的な方法も決まらない。タイミングでということになってしまいます。そこを、最低ここまではやったうえである程度ここで頑張らないと。ここで「えいや！」と決めていかないと。

高妻部会員

今回の環境調査の内容でかなりわかると思います。

小野部会長

ではもう一回、聞きたいと思います。手続き上の問題とか。私が特にわからないのは、親委員会で「どこまでやって良い」と言っているかということです。一応、「任せたよ」と言われたつもりで、こちらとしては色々な議論をしているように思っていますが。何かあるときには、「そこまでは課していませんよ」と言っ

事務局（小林副課長）

御用米曲輪のことは、こちらで議論等をやってもらいたい旨、調査整備委員会の了承を得ています。基本的にこちらで議論していただきたい。中間報告等あるかと思えます。今後今年度にも調査整備委員会が予定されています。そこで中間報告をして、委員の方々の反応を見て、フィードバックをして、というようにしていきたいと思っています。

小野部会長

宮内部会員から、鉄門のことが出ていましたが、第一回目でもそうでしたね。鉄門への登城口は、今の段階で生きているので、レーダー調査みたいなものはできるけれど、あれをどうこうというのは難しい。

今整備しようとしている池庭の背景にもなります。それにふさわしい諸景が必要になってくるかと思います。どこまでそれが出来るのか。宮内部会員からある程度話が進んでいく中で、具体的な提案をしていただけるといいのかなという気がします。

発掘を担当した佐々木さんから何かありますか。

事務局（佐々木係長）

鉄門坂の話を少しお伝えします。

鉄門坂は、おそらく小さな自然に地形の尾根があって、その地形を活用していたのだと思いますが、現在、鉄門坂に登っていく近世段階のお城の道の石組の側溝が、残って生きているから、それを壊すのはなかなか難しいかと思います。整備委員の両先生はご存知かと思いますが、平成 26 年の時に、鉄門坂についてはできる限り追及するというので、池を半分埋めた後、追いかけた調査をしたのが確認している範囲の限界です。これ以上物理的に掘るとするとやはり上からも掘り下げていかないとあの高さを掘ることは難しいかと思います。後で事務局（土屋）から報告しますが、その分盛土も厚いのでレーダー探査が難しいと業者には言われています。今後どう進めていくのかというのがあるかなと思っています。

最初に申し上げた通り、自然の尾根があったと思われますから、さらに何十メートルも続くということは、おそらくないかと思います。その辺の確認の仕方を検討していくことが重要かと思います。

小野部会長

そういった旧地形とか、近世かもしれないけれど戦国期に近い形での全体の曲輪の形とか、そういうデータは示してもらうことは可能ですか。

事務局（佐々木係長）

おそらく、その後の改変によりまして、ほとんどわからないかと思います。前回土屋が示した旧地形の状況と発掘調査の深堀で検出した地形との整合性である程度状況確認ができるのではないかと思います。

小野部会長

旧地形のデータは、環境調査の方でも役に立つ。旧地山の地形が分かれば水の問題が解消できる可能性がありますよね。

事務局側から質問はありますか。

事務局（土屋）

この後、私の報告の中にも絡めながら、お話しさせていただきたい。

小野部会長

いったんこの件はこれで終わりにします。

この後の発掘とレーダー探査を含めて、またもう一度、完結することにしたいと思います。

地中レーダー探査と発掘調査の方法について事務局から説明をいたします。

議事

（１） 報告事項

ア 地中レーダー探査と発掘調査の方法について（資料１）

事務局説明（土屋）

資料１に基づいて説明

前回ご提案いただいた来年度発掘調査範囲とその方法、地中レーダー探査、環境調査、石材の分析などについて、８月２３日に文化庁の整備部門の岩井調査官と協議を行ってきました。

報告１として発掘調査と地中レーダー探査の協議結果について、ご説明いたします。

前提として地中レーダー探査が発掘調査を進める上で、下調べの有効な情報になること、環境調査・石材分析には長期の分析時間が必要になることなどから、本年度の予算を流用して前倒しで進めるべく、調整と検討を行ってきました。その中で、地中レーダー探査の一部と環境調査・石材分析については、今年度からスタートさせる方向で調整を行っています。

地中レーダー探査については、発掘調査の行えない範囲やこれからの発掘調査の範囲や方法を検討するうえで必要な手段という理由で２枚目の青枠の範囲で実施するというのを岩井調査官には伝えました。地中レーダー探査の必要性を説明してきました。その翌日、探査会社と打ち合わせして、発掘調査で得られた遺構の堆積土の状況などを説明しました。青枠①・②が地中レーダー探査の想定位置だと考えていましたが、②の鉄門坂は盛土が非常に厚いことから、業者の考えでは、有効なデータが得られないとのことでした。②については、探査箇所から除外します。

残る範囲については、未調査部分を囲った範囲、探査①。約 4,000 m²あります。この中の、本年度の予算が許す範囲で、地中レーダー探査の範囲を決定していこうと思っています。昨日、業者から見積もりが上がってきて、本年度、現時点で流用可能な金額で実施できる面積は、900 m²という情報が入っています。真四角で考えれば 30m×30m程

度です。細長くもできるということですが、地中レーダー探査の性格上、細長いと把握がしづらいということがあります。短い辺は 10m 欲しいということなので、一番細い形で想定したとすると、10m×90m になります。そういった調査面積が数字としてあがってきていますので、本年度 4,000 m² 中 900 m²、①の中で範囲を検討していきたいと思っています。

現在、業者と仕様の詳細を確認しています。予算の残額も、他の業務の契約が進んできていますので、それで執行残が明確になってくると思います。その金額をもって流用可能な金額ということで、面積を出して、次回部会で具体的な数字を示して、今年度地中レーダー探査を行うか、というように議題にあげられればと思っています。今現在の探査方法の検討についてはそのような状況であるということの報告にとどめておきます。

来年度も地中レーダー探査の予算は計上しているのですが、地中レーダー探査は発掘調査の事前に確認できる有用な情報とか、未調査部分で行うことで情報が得られるということでやりますが、地中レーダー探査の解析にはしっかりとした報告書という体裁では 3 か月ほど時間をもらいたいということを聞いています。概報というかたちで、1 か月ほどで概要は示すことができると聞いています。例えば来年度、発掘調査範囲に絡めて地中レーダー探査を入れる場合、年度の当初に地中レーダー探査を早急に入れて、その結果を受けて発掘調査の手順を考えるということもできるかと思います。発掘調査範囲から大きく離れている部分の地中レーダー探査においては、ある程度余裕をもって並行とか、発掘調査に合わせてとか、その後にもっていくのも一つの手だと思います。時間としてそれくらいかかるということは確認していますので、併せて報告します。具体的には次回、検討材料の中で、示させていただきます。地中レーダー探査については、以上です。

次に発掘調査令和 5 年度の実施のところです。文化庁に現状変更の内諾を得た範囲では、トレンチの 1 から 3、図の赤丸の 3・4・5 です。

発掘調査はこれまでに確認した遺構の広がり、地中レーダー探査などの状況を参考に対象を絞って実施をしていきたいと考えています。赤枠の四隅、もしくは交差点部分の発掘調査を先行して着手して、そこの戦国時代の遺構の広がりを確認しながら、その間の発掘調査をするとか、そういったことを手順として行っていきたいと思っています。赤枠の範囲が最大の発掘が可能な範囲です。ご認識ください。トレンチ①②③、赤丸の③④⑤については、文化庁の整備の補助金で発掘調査が、来年度の予算申請が可能であり、現状変更の調査官からもこの範囲において、発掘調査を行うということは内諾をいただいたということが現在の状況です。以上です。

小野部会長

富永さんの方からは、このレーダーと発掘調査について何かありますか？

オブザーバー

同席していますので、同じ意見です。

小沢副部長

今、青で示してあるものの、4分の1以下ということですね。

事務局（土屋）

はい。

小野部長

話を聞いていてよくわからなかったけれど、発掘の方、赤枠で括ってあるところが一応トレンチ調査の対象のところっていう言い方でしたね。その中で交差点とか端の赤く塗りつぶした所がありますが、その意味が分かりませんでした。発掘を自分でやっている立場で言うと、せっかく長い発掘を設定しているのに、ピンポイントで掘っていくと見えるものも見えないのではないかと思ってしまいます。どうせ掘る予定にしているのならトレンチ単位で真っ直ぐ大きく抜いた方がいいのではないのかと思います。何か理由があるのですか。

事務局（土屋）

端や交差点から着手すると言ったのは、近世もしくは近世以降の攪乱などで戦国時代の面が失われていることが分かれば、その周辺は発掘調査から外していくという形にしたいと思います。発掘調査の範囲を出来るだけ絞りながら調査を進めていくという意味で、部分的にまず先行して掘りながら、その間をつなげていくような着手の仕方をするイメージです。

小野部長

最終的に赤枠で囲ったトレンチ全体を掘るだけの予算は用意されているという理解でいいですか。

事務局（土屋）

来年度の予算を現在申請中ですが、半年間の現地の発掘調査の稼働は想定しています。その予算の状況や、物理的に半年間の発掘調査でできる範囲というのがあるので、その辺を考えながら可能な範囲で発掘調査を進めていきたいと思っています。

小野部会長

この発掘・トレンチ調査の目的が、どれだけ未発掘調査のところに戦国期の遺構が確認できるか、どういう広がり方をしているかということなので。もちろん近世の攪乱が深く入ってしまっているところを丁寧に掘っても仕方がないですし、そうでないところについて、なるべくせつかくこれだけのスペースが用意できるのなら掘って、全体としてどんな風に遺構が広がっているのか。今日の1番目の問題ですよね。この空間全体にどんな遺構がどんなふうに広がっているのか。空白地も含めて遺構なので、顕著な建物があつたとか溝があつたとか、だけではなくて広場の遺構、何もない所も遺構と考えて、明らかに近世の攪乱でなければ、こういう空間があつたということになりますよね。その辺が予算と期間内でわかれば目的は達成できる、ということになります。

それ以上、掘り方まではとやかく言う気はありません。目的がうまく実現できれば、それでいいかと思います。

事務局（土屋）

可能な限りで、調べていきたいと思います。

小野部会長

この辺を前に掘った佐々木さんとしては、助言はありますか。

事務局（佐々木係長）

おそらく③④⑤をいっぺんに抜くというのは、予算的に時間的に厳しいかと思います。現在奥の空間として確認している南西部分も中心となる遺構面に匹敵する面の上にも一枚別な面が有りますので、その面をこれだけ全部掘ってしまうのかという問題が出てくると思います。その辺との兼ね合いでの調査方法だと思います。あとは、担当者がどうやるか。実施計画を作る課ということかだと思います。

小野部会長

土屋さんが言っていたとおり発掘しながら状況を見て変更可能だつていうことですよね。掘っている最中に見たいです。みんなでそこで議論すればいい。掘り終わって結果こうでしたつていう委員会は面白くない。委員会の日程も含めてうまくセットしてもらいたいです。

事務局（土屋）

はい。

中島部会員

記憶が確かではないのですが、トレンチ③の一番南寄りのあたりというのは攪乱がありそうだというお話であったかと思います。そうすると、ここに書かれているように両端と中央を先行して調査し、というところですが、一番南側がもしかすると優先度が低くなるのかなと、最終的に余裕があったら抑えとした方が良くかもしれません、と思いました。

事務局（土屋）

はい。予算や時間が限られていますので、優先度を含めて精査して着手していきたいと思います。

事務局（佐々木係長）

今、中島先生が発言されたように、③に近いところは攪乱の可能性が高い。それも含めて事前に実施する地中レーダー探査の結果が反映されると思います。土屋が説明した通り、実施可能な範囲というのを次回説明するということでしたので、地中レーダー探査をどこを優先して実施するのか、範囲等を次回に確認いただきたいと思います。それによってトレンチの位置が決まってくると思いますので。

小野部会長

そうですね。その前提としての地中レーダー探査ですからね。それがわかれば、もっと有効に優先順位が決めていかれると思います。結論が出るのはいつでしたか。

事務局（土屋）

次回の部会までかなり具体的な数字で示せるかと思います。

小野部会長

では、それをもって、一応トレンチ案は、委員会としては了承。その後その情報をもって次回、正式なやり方を考えましょうか。

事務局（土屋）

はい。

小野部会長

では、地中レーダーと発掘調査についての議論はこんなところで。よろしいですか。次、④のところ御用米曲輪の環境調査等の業務について説明をお願いします。

イ 御用米曲輪環境調査等業務について（資料２）

事務局説明（土屋）

資料２に基づいて説明

御用米曲輪の環境調査等の業務委託についてご説明します。

前回高妻部会員からご提案頂いた、環境調査の選考事例について、石川県能登町の松浪城、福島県の宮畑遺跡の担当者や業者から聞き取りを行いました。非常に丁寧に説明をしていただきました。その中で、前回の部会の中で、石材の分析などもお話頂いたので、環境調査と石材分析を行っている調査会社があったので、御用米曲輪の状況を説明して必要な調査項目をまとめました。

メールで高妻先生に内容をご確認いただいて、業者に見積を取りました。金額的にも今年度の流用の中で実施が可能な目途が付きましたので、文化庁にも相談して、本年度前倒しで実施するという事になっています。

資料２ 業務委託の内容項目を示したものです。

① 雨水。降雨量の調査です。

御用米曲輪の中に機材を設置して降雨量を測定するものです。

② 温湿度・紫外線の強度・照度の測定を行います。

③ ボーリングを行って、その穴を利用した地下水位の測定を行う予定です。

御用米曲輪には、２号池跡と平場の大きな２つの環境と課題箇所がありますので、２か所の設置予定で仕様を作っています。

④ 土壌の含水・透水試験。

御用米曲輪に関しては、ボーリングで採取した土壌を使って、その土壌自体の含水性・透水性を確認します。屋内で行われる試験になります。

⑤ 石材の分析です。樹脂の耐候試験になります。暴露実験という呼び方をするそうです。

御用米曲輪の場所に実際の石材を置いてどういった劣化がみられるのか、どういった樹脂を塗れば劣化が防げるのかといった実験を行うものであるということです。

⑥ 岩石自体の含水性・透水性を確認する。

⑦ スレキング試験です。石材については、凝灰質砂岩と溶結凝灰岩の２種類が、安山岩に比べて劣化するタイプの石であるという認識のもと、それぞれ２種類ずつを用いて、計４点の実験を行うということを想定しています。このような内容を今後どのようなスケジュールで行うかということ、工程表でご確認ください。⑦⑧⑨が今回、前倒しで行われるものということで入っています。環境調査については２年間の期間がかかると考えています。開始は文化庁の補助金の変更申請後に入札などを行って決まります。１０月後半から１１月にかかってしまうかもしれませんが、準備が整い次第開始したいと思います。２年間の想定ですから、令和６年度までかかるものと考えています。

ボーリングで採取した土壌の含水・透水試験は、年度内に結論が出ます。本年度で終わる項目です。

環境調査については以上です。

石材分析について。岩石の含水・透水試験、スレキング試験は、年度内で完結と聞いております。

暴露実験については現地で長期に観察する必要があるということで環境調査と同様に2年間の工程を考えています。

基礎調査の期間の令和6年度の途中で、環境調査と石材分析については調査が終了する形になります。このような流れで行っていただければと考えています。

測定値の途中結果など状況は随時、部会で報告させていただきます。以上です。

小野部会長

高妻さん、何か今後の調査についてご指摘ありますか。

高妻部会員

気になったのは、4点というのは試験材が4つ、ということですか。

事務局（土屋）

はい、そうです。

高妻部会員

たぶん石材のサンプリングの仕方、だと思うので、複数点、最低でも5点ぐらいあって平均値を出した方がいいと思います。

事務局（土屋）

わかりました。凝灰岩で5点、砂岩で5点。

高妻部会員

それに色々な樹脂の種類だけ数が増えると思います。

事務局（土屋）

はい。サンプルが必要になるということですね。各2点というのは、業者からの提案でした。実際の石を見てもらってはいなかったなので、そのような提案だったと思います。ご指摘の旨、わかりました。5点で検討したいと思います。

小野部会長

スケジュール感はどうですか。大丈夫ですか。

これはまた、委員会の時でも良いし、時々高妻さんだけ来てもらっても良い。必要な時には、ご足労ですが少し来て指導してください。

でも、良かったね。もっと遅く、来年ぐらいから始まるのかな、と思ったけれど。委員会で「わーわー」言ってたせいもあって、早くから動き出して、あっちこっちから流用ができた。文化庁もそれで納得しているはずですから。

後で追いかけるられないので。時間制限がありますから。文化庁にいろいろ言われるかと思っていたけれど、良かったですね。

（２）その他

とりあえず、用意された報告事項は２つですが、何か委員の皆さんからあればうかがいます。

小沢副部会長

スケジュール表を見ると、次回、11月7日になっていますが。次回の委員会に具体的な範囲をというお話でしたけれど、11月7日に出てそれから始まるということですか。

事務局（土屋）

そうですね。11月7日に出てそれから始まります。工程表を修正いたします。

小野部会長

他の業務の動きで日程が決まってきますね。今までは委員会だけの感じで来ていたけれど。わかりました。大丈夫です。

では、本日の全般にわたるご意見があったらいただきたいと思います。富永さん、コンサルさん、いかがですか。

オブザーバー

大丈夫です。

コンサルタント

大丈夫です。

小野部会長

今回用意された議題は終わりました。本日はこれで終了いたします。お疲れ様でした。

事務局（土屋）

報告事項として、6月23日文化庁整備部門の岩井調査官と協議を行った際、戦国時代の庭園遺構が発見されるなどした、小野先生のスライドにもあった服部幸太郎邸の件です。戦国時代の庭園遺構が発見されて、昨年度追加指定された小田原城三の丸服部幸太郎邸跡第2地点について、令和5年度に実施設計を策定する方向で予算を申請予定でいます。この遺跡が小田原城で初めて戦国期の遺構を史跡整備する例になることから、御用米曲輪の検討部会ですが戦国時代の専門家を集めていることから、本部会でも議論をいただいたらどうかという意見をいただいています。つきましては、このことについて、調査整備委員会に報告して、どのような形で進めるかという話をしてから本部会で改めて話させていただきます。ご承知おきください。

事務局（小林副課長）

議事録ですが、第一回の議事録について、部会員の皆様から修正がなかったので、配らせていただいたものをもって正式なものとさせていただきます。第二回の修正については、本日が締め切り日になっています。中島先生からはいただいています、ほかの先生方、修正がありましたら後でおっしゃってください。

小野部会長

議事録の確認者はこの委員会おいていますか。他所の委員会はありますよね。

事務局（土屋）

ありません。

事務局（小林副課長）

親委員会はおいています。

小野部会長

わかりました。議事録作成のために、時間をかけるのは大変だと思うので。何が問題になってどういう点が指摘されたのかが分かれば、次回お互いにその宿題をもって議論できれば良いと思います。あまり無理な時間をかけないでください。

事務局（湯浅課長）

それでは、本日の日程を終了させていただきます。次回第4回の部会は、11月7日（月）に予定しています。時間については調整させていただきたいと思います。議題を整理させていただいて相談させてください。これを持ちまして会議を終わらせていただきます。ありがとうございました。